



【2017-04-12】

遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒を楽しみ、
人生を味わう

今週の雑感

『箇条書き「組織の盛衰」

堺屋太一（著）から

人間と組織を学ぶ』

長野修二

箇条書き「組織の盛衰」から人間と組織を学ぶ

「組織の盛衰」は初版本が1993年に出版されていますが、私が読んだのは1995年頃だと思います。

当時のベストセラーだったように記憶します。

組織と人間の問題は永遠のテーマですし、多くの人にとっての課題でもあるようです。

小さなものから大きなものまで限りなく存在し、これからこのテーマは永遠に続いていくのが人間社会なのかも知りません。

私が今読んでいる本も組織と人間について書いてあるものです。

懲りずによく読んでいます。

また、本をなんと読んでも問題の解決は、ビジネスの現場における人間に帰着するものと知りながら、問題の根深さからつい本を手にとってしまうようです。

堺屋氏がはじめに書いている「この本の目的は二つある。一つは、現在の組織、特に日本の官僚機構や企業組織などの現状を点検して正確に観察し、その改革改善と新しい創造に役立つような発想をと手法を提供することである。

今日、日本経済は不況といわれている。つい三年前までは『世界無敵』のようにいわれていた日本企業が、今は業績悪化に喘ぐ有様である。

日本の経済実態は、決して破滅的なほど悪いわけではない、それどころか、1992年においても経済は成長し、失業率はきわめて低く、貿易は人類史上最大といわれるほどの黒字だった。

この国に重大な天災が起こったわけでも、外敵の侵攻危機があったわけでもない。いわば天下泰平四辺平穩である。それにもかかわらず、企業の経営者や中堅幹部から漏れてくるのは、不況の苦吟と政治救済を求める叫びばかりだ。たかだか、土地や株が値下がりし、消費需要が少々前年割れになった程度でこうも大騒ぎになるとは、日本の企業組織がいかに弾力性を欠いている証拠だろう。

一中略一

この本のもうひとつの目的は、この国に組織論または組織学の体系を広めることだ。

今の世の中は、すべて組織で動いているといえる。ところが、その組織に関する調査研究は、必ずしも多くはない。近代の学問体系は、あらゆる分野を細分化し専門化して、きわめて高度な知識と技術を作り上げて

来た。その中で、組織に関する研究だけは、著しく立ち遅れている。

—中略—

しかし、これらの大部分は組織の観察と影響を論じることには主眼が置かれ、組織そのものの種類や要素、機能や構造に関する体系的な論理にまでは到達していない。組織は社会の原点であり結果であっても、体質と気質を備えた生態としては考えられていないのである。

おそらくこれには、組織と学問との気質的な背反性も影響しているに違いない。実際社会で組織の運営管理に当たる人々は、現実志向にならざるを得ないので学問的興味が乏しい。一方、学術研究に秀でた人々の多くは、組織的な思考が薄く面倒な実務に入りたがらない。この結果、組織は存在としては認められても、体系的な学術研究の対象とはなり難かったのではないだろうか。」

いろいろな組織論を読んできたが、「組織と人間」をテーマにすると大きな齟齬が生じるよう思います。

その理由は、人間の存在は複雑だからです。

いくら組織論を読んでもこの二者間の隔たりは大きく、おそらく将来も変わらないだろうと思います。

それでもなぜ「組織論」を読むのかといえば、そこから人間を知ると同時に人間が作る組織がいかに脆弱かを知っておくことで日々の実務に真の意味を見いだせるからです。

結論とすれば、組織改革における原理原則を人間という立場から見ることができ、いたずらに組織改革ばかりをいうのではなく、その企業の人間をみることでしか組織改革はできないと信じているからです。

組織改革の手法はたくさんありますが、日々企業の中で仕事をする人間をはずして組織論も存在しません。

だからこそ、組織論を学ぶ限界を知りながら、あえて組織論を学んでいるのです。

[筒条書き「組織の盛衰」から人間と組織を学ぶ](#)

